

長曲線に沿って培養中に順次出現する特徴的なモルフが、それぞれ一つの分類群に対応してしまうことが示されている。

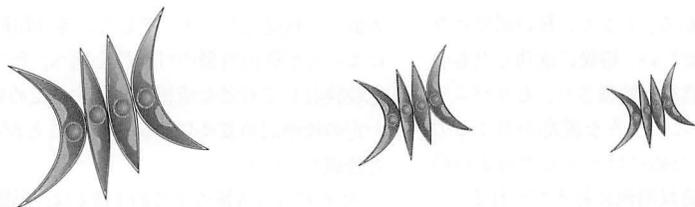
1829年以降今日までに、セネデスムス属の藻類として、膨大な数の分類群が記載されてきたが、その多くは、一つのモルフのみを記載したものである可能性が高い。今そして今後必要なことは、固定標本を調べる伝統的なアプローチではなく、培養によって各分類群内の表現型の可塑性を解明することである。つまり、形態輪廻を十分考慮して多様な生態的モルフの連続性を明らかにすることである。培養を基盤とするこのアプローチこそが、セネデスムス属の系統分類学を進展させ、フィールド観察での正確な同定をも可能にする。

これが著者の主張の一つである。

次に問題は、可塑性に関する有効な知見を、どのようにセネデスムス属の系統分類に導入するかである。単細胞をはじめ、多様な生態的モルフを包括する記載が不可欠であり、命名規約上の問題も多いので、新しいパラダイムが求められることや、今後の問題として分子生物学的研究の重要性についても言及している。

本書は、セネデスムスに関する研究の過去と現在を総括し、未来への展望を明示している。それ故、その歴史と現状を理解するために役立つだけでなく、セネデスムス属及び近縁の属に関して今後の研究指針を再確認させてくれる。

大島海一（日本大学生物資源科学部生物学研究室）



書評 新刊 紹介



能登谷正浩 編著

「アオサの利用と環境修復」

2,600円 成山堂書店 171頁

緑藻・アオサ類は、日本の北から南までごく普通に見られる海藻である。しかし、

近年、内湾域の干潟や富栄養化域の海浜に大量のアオサ類が漂着し、美観や衛生上の問題が生じたり、アサリ漁場などで漁業被害が生じている。実は、アオサ類を含む緑藻類の大繁殖は、日本では20年以上前から知られていた。それが最近になって、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどの沿岸でも発生し、世界的な問題となり、“赤潮”に対比させて“グリーン・タイド”と呼ばれるようになってきているのである。

本書は、生物としての未解明点を多く含みつつ、沿岸海域での環境問題で注目されるようになったものの、一方で資源海藻でもあるというアオサ類について、多様な専門の執筆陣により、多側面から研究の光

を当てて成果を取りまとめられた、時宜を得た好書である。本書は、編著者であり東京水産大学で応用藻類学を専攻されている能登谷正浩氏を中心に、海洋、植物・海藻、生殖生理・生態、微生物、化学、水産増殖、環境、工学などの学問領域、一方、水処理、家禽の飼育管理、環境保全・修復、腐食防食などの技術領域を専門とする16名の執筆陣によって分著されている。本書は、「第1章・アオサと大繁殖、第2章・種と生育の特徴、第3章・静穏な海域で栄養繁殖する種、第4章・水質浄化と環境修復、第5章・増養殖魚と鶏の餌への利用、第6章・食用や医薬品への利用」と章建てられ、各章中の各節を執筆者が完結させる構成となっている。そのため、関心の深い順にどの部分からでも読み始められるような、読者に対する配慮を感じる。

本書を読み進むうちに、今後の沿岸海域の利用方針を摸索する上での、総合的な科学知識と利用技術の枠組みが、アオサ類という海藻を素材とした例の姿として、眼前に浮かび上がる。そのことは、「おわりに」での、大繁殖したアオサ類の藻体について、各地域での利用・対策を検討することはもちろんのこと、天然のリサイクル資源として、より系統だてて有効利用することの大切さ、の示唆に集約されている。

寺脇利信（瀬戸内海区水産研究所）